

# 第7回平和市長会議総会 記者会見

2009年8月10日(月) 15:15~16:00  
長崎ブリックホール会議室

平和市長会議会長	秋葉忠利(広島市長)
平和市長会議副会長代理	スザンナ・アゴスティーニ(フィレンツェ市議会議員・イタリア)
平和市長会議副会長	ドナルド・L・プラスケリック(アクロン市長・アメリカ)
平和市長会議副会長代理	ミシェル・シボ(マラコフ市事務総長・フランス)
平和市長会議副会長	リュック・デハネ(イーペル市長・ベルギー)
平和市長会議副会長	ジョセフ・アンティガス(グラノラズ市長・スペイン)
平和市長会議副会長	ロバート・ハーヴェイ(ワイタケレ市長・ニュージーランド)
平和市長会議副会長	キダー・カリーム(ハラブジャ市長・イラク)
平和市長会議副会長	田上富久(長崎市長)

**司会（中川 長崎市広報広聴課長）：**

皆様、こんにちは。ただ今から記者会見を始めさせていただきます。私、進行役を務めます長崎市広報広聴課長の中川です。よろしくお願いいたします。

本日の記者会見は、平和市長会議の会長および副会長の皆様にご出席いただいております。記者会見は16時までの予定となっております。まず、出席者の皆様から、会議を終えてのご感想を述べていただき、記者の皆様からの質問はその後にお受けいたしますので、よろしくお願いいたします。

それでは、会長の秋葉忠利・広島市長からご感想をお願いいたします。

**平和市長会議会長 秋葉忠利（広島市長）：**

3時45分にここを出なくてはいけない副会長都市がいくつかありますので、そちらに先に感想を言っていただきたいと思います。順番は変わりますけれども、そういう形で頭の整理をさせていただければと思います。

**スザンナ・アグステイーニ（フィレンツェ市議会議員・イタリア）：**

イタリアにとって、平和市長会議への加盟はとても重要です。イタリアの300以上の都市が平和市長会議に加盟していますが、その数を倍にしたいと思っています。

この会議の後、希望を持つことができました。最後にナガサキアピールが採択されましたが、とても重要なアピールであると考えています。新しい役割を世界中の市長に与えることができ、市長は、人々の健康と福祉のために、本当の意味でコミュニティの代表として活動できると思います。福祉とは身体的な健康だけでなく、環境も含み、雇用の機会や市民の権利も含みますが、市長は市民のより良い生活の質を保證できると思います。

このアピールが採択されたからには、2020年までの間に、原爆のように最も恐ろしいこと、他の劇的な出来事も世界からなくなることを希望しています。平和市長会議が実践しているように、市長は市民団体と協力して、全ての人類の気持ちを代弁する市民のために行動を取らねばなりません。

また、世界の主要国のリーダーとも協力できることを嬉しく思います。同時にオバマ大統領の行動に感謝しており、それにならって核廃絶に向けてのキャンペーンを進めていきたいと思っています。それぞれの国の都市を挙げて、この活動を続けていきます。

われわれは共に田上市長に感謝したいと思います。秋葉市長が仰ったように、われわれのパッチワークのキルトがますます大きくなることを希望しています。

**司会（中川 長崎市広報広聴課長）：**

ありがとうございました。フィレンツェ市議会議員のスザンナ・アグステイーニ様をお願いいたしました。

続きまして、副会長のドナルド・L・プラスケリック・アクロン市長、お願いいたします。

## ドナルド・L・プラスケリック（アクロン市長・アメリカ）

まず、秋葉市長、田上市長、スタッフの皆様、このように大成功に終わった会議の準備をして下さった方々に感謝申し上げたいと思います。

世界の全ての人たちがより理解を深めるためには、更に教育を行っていかなければなりません。これは共通したテーマであると思います。われわれの主要な目標として、市長はリーダーシップをとって、われわれがやっていることは非常に重要だということを理解してもらわなければなりません。

アメリカでは全米市長会議で 500 名以上の市長が同じような活動をして、司法に働きかけています。特に全米市長会議は一つの組織としてワシントンでロビー活動を行って、こういったことが市民にとって重要であることを理解させようとしています。

われわれの直面している問題の一つに経済危機があり、ほとんど全ての国はその影響を受けていますが、核軍縮により、その状況を救うことができます。軍拡に非常にお金を使って無駄遣いをしているわけで、その資源を使えば、人間のニーズ、社会のニーズに応えることができます。アメリカは豊かな国ではありますが、住宅問題があり、貧しい人もいます。また、教育やインフラの問題もあります。

どこであろうと、こういった問題に直面しているので、世界のリーダーたちにわれわれの目標を理解させ、人類が直面している問題を理解させ、核にお金を使うのではなく、より良い使い方をすべきであることを理解させるよう働きかけなければなりません。

祈念式典では、記憶に残る経験をさせていただきました。そして、爆心地に私自身がいることにより、64 年前に何が起こったかということを知り、被爆者の経験を伺うことができました。当時、9 歳で、まだまだ鮮明に記憶が残っていると仰った被爆者のお話を決して忘れることはありません。われわれは、こういった直接被害を受けた方々の話を引き続き、ほかの人たちに伝えていく責務があると思います。引き続き新しい世代を教育して、伝えていかなければならないと思います。

式典が終了する時に、私は、色々な質問を受けました。私は本日帰国しなければなりませんので、今お話ししたいと思います。記者の皆さんの多くはこのことを質問したいかもしれませんが、私はアメリカ人の一人として、60 年以上も前に何が起こったかということを見直し、問題の根本を見ることが、どちらかというと時間を使いすぎているのではないかと思います。1945 年 8 月に広島・長崎で起こってしまったことを、世界のどこであっても絶対に決して繰り返してはいけないということが大切です。

私の父の世代の事情ですが、父は海軍の太平洋艦隊にいました。その時代の信念は今の世代とは違うと思いますし、次の世代でもその考え方、見方は変わってくるかもしれません。私は孫の写真をいつも持っています。われわれは、彼らのために世の中を改善し、彼らの人生を改善していかなければなりません。そのために、われわれはリーダーとして、市長として、自分たちの地域社会に対して、このメッセージを伝え続けなければいけないと思います。声を上げて、私の孫の世代のために、この問題がいかに重要であるかという

ことを伝えていかなければなりません。つまり、緊急性のない不毛な議論よりも、むしろ広島長崎で起こったことを繰り返してはいけないという点を伝えていかなければならないと思います。これが市長としての私の誓いであり、全米市長会議も同様であると信じております。

全米市長会議は、1984年に核不拡散についての決議を採択していますが、もう20年以上これを継続して何回も繰り返し行ってきました。私はここにお集まりの市長の皆様とともにナガサキアピールを支持し、世界各国の指導者に対し、孫の世代のために将来に視点を置き、素晴らしい、より良い社会にしていくよう呼びかけていきたいと考えています。ありがとうございます。

**司会（中川 長崎市広報広聴課長）：**

お二方は、ここでご退席になりますので、ご了承いただきたいと思います。

続きまして、マラコフ市のミシェル・シボ事務総長にお願いしたいと思います。

**ミシェル・シボ（マラコフ市事務総長・フランス）：**

少し歴史の話を見せて下さい。1975年に私は初めて被爆者の証言を聞きました。この証言を聞いて、私の人生が変わったと思います。その数年後、私は、当時の広島市長であった荒木さんに会いましたが、その時の考えは、核兵器廃絶に市民を巻き込もうということでした。私は、それから日本に頻繁に来るようになり、広島・長崎を頻繁に訪れ、前の総会にも参加しています。平和市長会議で市長や色々な参加者、あるいは他の市長と話して、私は非常に多くのことを学びました。おそらく一番素晴らしいことを学んだのではないかと思います。

今会議が終わりましたが、非常に啓発されたと思います。われわれは、今回の総会を通して、また新しいことを学びました。これがこの会議に参加することの意義の一つだと思います。

もう一つのメリットは、この総会においては、核兵器廃絶に向けて、組織が拡大し、組織の活動が発展していくというように、新しいステップへ前進していることです。われわれは数日間に色々な作業を行い、大きく前に進んだと思います。

われわれが作ったこのナガサキアピールは一つのツールになると思います。このツールを使って、色々な人を動員し、われわれの町の市民に説明することができます。平和市長会議のネットワークを最大限使ってこのアピールを普及させていかなければなりません。

アクロン市長は、予算配分の問題を指摘されました。これはもちろん一番重要な基本的な問題で、軍事費の30%をそれ以外のところに振り分ければ、多くの人道的問題が解決できるのに、それができないのは残念だと仰いました。

私は、特別な点について強調したいと思います。つまり、核兵器は完全に人権の対極にあります。あるいは国際法、道徳の対極にあります。こういう基本的な矛盾があるのです。

これがフランスのような核を持っている国ではあまり重要視されません。

最上先生は、核兵器の存在と全てを壊滅させる力、大量殺戮について言及されましたが、大量殺戮に賛成する人は誰もいません。

広島市、長崎市に対して、今回の会議を開催して下さい、お礼申し上げたいと思います。私は後50年も来ることはできないと思いますので、若い人に道を譲りたいと思います。フランスの代表団として、かなり若い人を連れてきましたが、次回も同じようにできるよう願っております。今回の会議を終えて、われわれは非常に勇気づけられて帰ることができます。ありがとうございました。

**司会（中川 長崎市広報広聴課長）：**

ありがとうございます。では、イーペル市のリュック・デハネ市長、お願いいたします。

**リュック・デハネ（イーペル市長・ドイツ）：**

ジャーナリストの方々が、市長に対して質問しても、答えが返って来ずにスピーチになってしまいがちです。私は例外として、質問にお答えしたいと思います。

ご質問いただいた「これから自国に帰るにあたって、何が一番重要なこととして心に残っているのか」についてですが、ナガサキアピールはシンプルですが、非常に重要なものということです。正によく練り上げられたはっきりとした声明で、これは、3000人以上の世界の市長の気持ちを代表していることを忘れてはなりません。来年の5月にNPT再検討会議が開かれますが、それまでの間に加盟都市を5000以上にしたいと考えています。

しかし、私の心情として忘れられないこととなったのは、被爆者と直接出会ったことです。私の祖国、都市における私の祖父母、両親の時代に受けた苦しみと同様であり、このような苦しみは世界中どこでも同じではないでしょうか。ですから、今回の原爆記念日に祈りを捧げることは、とても素晴らしいことだと思いますし、この教訓を決して私たちは忘れてはならないと思います。ありがとうございました。

**司会（中川 長崎市広報広聴課長）：**

ありがとうございました。続きまして、グラノラーズ市のジョセフ・アンティガス市長にお願いいたします。

**ジョセフ・アンティガス（グラノラーズ市長・スペイン）：**

今回、初めて日本に参りましたが、母国を離れて広島、長崎で過ごした数日間は心を開かせる有意義な経験の連続でした。非常に情熱に満ちた日々であったと思います。秋葉市長が情熱の話をされましたし、それぞれの市長の姿勢は、やはり情熱のこもったものであると考えます。そして、常に市民と対話をされています。市長としての主な仕事は、市民と対話し、市民から学ぶことですが、市民は、より良い平和な世界を望んでいます。われ

われは世界を変えることができると考えていますが、爆弾や暴力ではなく、対話で変えていかなければなりません。われわれ市長は、市民を代表しており、平和を自らの都市から日々追求していきたいと考えています。そういう意味で、市長は大きな役割を担っており、それを目に見える形で世界に伝えていかなければなりません。それは、市長として平和構築の第一線にいると認識しているからです。

われわれは、将来の道筋を示したナガサキアピールを採択しました。将来は、教育が基本であり、世代を超えた話し合いをして、若い人たちに伝えていかなければならないと考えています。若い世代と共に話をし、将来をより良いものにしていかなければなりません。

自国に戻ったら、現在はより力がついていると思います。皆様と共に連帯できるからです。どうもありがとうございます。

**司会（中川 長崎市広報広聴課長）：**

ありがとうございました。続きまして、ワイタケレ市のロバート・ハーヴェイ市長にお願いいたします。

**ロバート・ハーヴェイ（ワイタケレ市長・ニュージーランド）：**

こんにちは。私は、ニュージーランドを代表して皆様にご挨拶申し上げます。私は、国内約 100 人の市長を代表して来ています。このような形で代表しているのは、ちょっと申し訳ないような気持ちです。つまり、私は既に非核宣言をしている国から来ているのです。ニュージーランドは 1975 年以来、非核国家になっています。私自身も長年の間、核廃絶を求め、アメリカの核搭載船舶、原子力潜水艦、原子力船の入港を何とか止めようとし、カヌーや小船でアメリカの原子力潜水艦に体当たりしようとしたこともありました。アクロン市長は帰られたのでこれを聞いてないですね。1975 年、ニュージーランドは完全な「ノーモア核」ということで、どんな形でも核を持ち込ませないという非核宣言をしたのです。

ニュージーランド首相と非核・軍縮の担当大臣から皆様へのメッセージを私の良い友達である秋葉市長にお届けしています。

ニュージーランドは非核を達成しているので、私は、反対派を説得するという本当に大変な仕事をしなくていいことを誇りに思っています。私が代表しているニュージーランドの全ての市長は、小さい都市も含め平和のために活動しています。

ニュージーランドは、400 万の人口しかありませんが、攻撃を受けたことはありません。これも非常に幸運なことだと思います。しかし、われわれの子どもたちは、核兵器が何を起こすかということを知っていますし、日本の過去についても、どのような脅威が襲ったかということも知っています。

その意味で私は、モデル国から来たと思っています。世界の友人たちから、それぞれの国で国全体を説得するためにどれだけ苦労しているか聞いております。私の活動は、おそらく 1952 年、12 歳のときにオークランドで広島のパネルを見たときから始まったと思い

ます。大きな大きなパネルで、完全に広島が破壊され、廃墟となった写真でした。私はここから、何かをしなればいけないと考えたのです。

私は68歳で、ニュージーランドで最も長い期間を務めた市長ですが、長崎に来ることができて、本当にうれしく思っています。私の一生をかけた核廃絶運動の最後のところまで来て、ここに来ることができて、本当にうれしく思っています。

これ以上、加える言葉はありません。ここに来ることができて、本当に素晴らしい旅程でした。本当に素晴らしい人、長崎市長、広島市長にお会いすることができました。われわれが住んでいるこの惑星の中で貴重なお二方です。私は、このお二方と同じ時代を生きていることをうれしく思っています。

**司会（中川 長崎市広報広聴課長）：**

ありがとうございました。続きまして、ハラブジャ市のキダー・カリーム市長にお願いいたします。

**キダー・カリーム（ハラブジャ市長・イラク）：**

まず、私は英語を話せないことをお詫び申し上げます。クルド語で話して、通訳をしてもらいます。まず、長崎市長に、今回、歓迎して下さったことを感謝申し上げます。また、64回目の被爆の祈念式典を開催されたこの美しい都市にお礼を申し上げます。色々な都市、色々な国から色々な人が来て、その人たちが皆心を一つにして平和のために働いていることを、私はとてもうれしく思っています。われわれの都市は、数年前は独裁政権の下に置かれていましたので、こういうことは不可能でした。しかし、今はわれわれの平和への願いを表現することができるようになりました。

あまり皆さんのお時間を取りたくはありませんが、一つ、非常に重要なことを言いたいと思います。われわれの都市は化学兵器によって完全に破壊されたことをお話ししなければなりません。平和がなければ、われわれは共に生きることはできません。21年前、われわれの市では5000人の市民が化学兵器によって殺され、10000人以上の人たちが怪我をし、残った人々はイランに逃れていきました。当時、わずかな例外を除いて、世界にこの悲劇は伝えられませんでした。しかし、21年経って、かつて世界に無視されていたこの町は、イラク及び近隣諸国における平和の中心地という認識をされるようになりました。

われわれは、イラクだけでなく、近隣諸国のためにも、平和市長会議の事務所を開設しました。私が誇りに思うことの一つは、ハラブジャの子どもたちや大人に対して、広島、長崎、イーペル、マルツァボットとは何かということを問いかければ、これらの悲劇の詳細を彼らが語るができることです。皆様と共に平和のために尽力したいと思いますし、また、各国首脳にこうした虐殺の被災地、特に長崎と広島を訪れていただくよう要請したいと思っています。また、これらの戦災都市をともに追悼し、新しい世代に伝えていければ良いと思います。

最後に、改めてお礼を申し上げます。われわれは、2020年への共通の目標、核廃絶に向けて取り組んでいきたいと思っております。ありがとうございました。

**司会（中川 長崎市広報広聴課長）：**

ありがとうございます。では、秋葉会長、よろしいでしょうか。

**平和市長会議会長 秋葉忠利（広島市長）：**

今日、平和市長会議の最終日を迎えることができました。ナガサキアピールを採択することができて、平和市長会議のこれからの方向性が確固とした基盤の上に乗ったということで、たいへんうれしく思っています。これはたいへんパワーのあるアピールだと思います。来年のNPT再検討会議で、是非これを採択してもらうために、今後も活動を続けたいと思っております。そのための色々なアイデアが、今回の会議の中で色々な都市から提案され、必ずしもその一つひとつがアピールの中に盛り込まれてはいませんが、具体的なレベルでの活動についてのヒントをたくさんもらうことができたと思っております。

Eメールとか、様々な形でコミュニケーションをしているのですけれども、こういう形で志を同じくする全世界の市長、NGOの皆様、市民の皆様が一堂に会して意見交換をするということで、具体性が見えましたし、人間的な共感、人と人の触れ合いによって生まれる新たな創造的なエネルギーも生み出すことができたのではないかと思います。

私は、その上でいくつか基本的なことを確認できたのではないかと思います。一つ目は、オバマ大統領がたいへん素晴らしいスピーチをしてくれましたが、ある意味で世界を変えることになる、われわれの目標を達成するための力は、われわれ自身の中に、それぞれ都市の中に、市民一人ひとりの中にあるということが確認できたことです。そして、その力は、それぞれの都市が持っている歴史、悲劇の経験といった文脈の中できちんと発揮されるということです。

二つ目は、自分の中にある力、エネルギーを活用するためには、当然、自分自身で足元からきちんとした活動をしていかなければいけないことはもちろんですが、みんなで一緒に協力して、更に大きな力にして、国際的、世界的にも視野を広げながら協力体制を作っていくことです。ナガサキアピールの中でも“*Yes, together we can abolish nuclear weapons.*”という表現を使いましたが、「together」という言葉が何度も出てきました。一緒に手を携えて協力し合って達成することが重要であるという意味を、より具体的に確認できたと思っております。

三つ目に、先程、アクロン市長も言われたように、こういったことをわれわれが大事だと思っているのは、結局、子どもたちのためにより良い未来をつくるためであることも確認できたと思っております。だからこそ教育が大事であり、未来の世代に被爆体験を伝えていくことがとても大事であるということになると思っております。

最後に、それぞれの都市のリーダーがここに集まって、素晴らしいナガサキアピールを



採択してくれました。3000以上の都市の市長たちが、ただ単に古い枠組み、今までの物事のやり方にしがみ付いているのではなくて、新しい枠組みの中で世界を見ていこう、自分たちの未来を創っていくための新しい枠組みを作っていこう、という気持ちを持っています。市長は、市民たちの持っている最善の力を引き出せるようなリーダーであることが必要なのですが、そういう力、ビジョンを持った市長がたくさん出席して下さい、たいへん良いアピールを採択してもらえたということで、これからのわれわれの活動について大きな希望を持つことができます。そういう意味で、参加者の皆様に心からお礼を申し上げたいと思います。

マスコミの皆様には、今回の報道を見ると、われわれのそういう精神を十分理解していただいて、たいへん前向きな報道が多いことに、改めてお礼申し上げます。ありがとうございます。

**司会（中川 長崎市広報広聴課長）：**

ありがとうございました。それでは、最後に、田上市長、よろしく願いいたします。

**平和市長会議副会長 田上富久（長崎市長）：**

終了しての感想ということですので、まず第一に、開催地として感謝申し上げたいと思います。今回、初めて長崎市単独の開催ということで、小さなミスは色々ありましたけれども、参加者の皆様、関係者の皆様にカバーしていただいて、非常に前向きな会議になり、皆様の笑顔の中で終わることができ、ホッとしています。本当に皆様に感謝したいと思います。特に、通訳も含めて、最初の歓迎レセプションのときにも、たくさんの市民が参加してくれましたが、最後の閉会式でも子どもたちまで多くの市民が参加し協力してくれたことに、心から感謝したいと思います。

まず、被爆地としてという意味でいうと、非常に良い発信の機会になったと思います。世界から集まれた市長に、実際に被爆者の体験を聞いていただき、原爆資料館を見ていただき、平和祈念式典にも参加していただきまして、長崎の思い、体験を実際に体感していただけたのではないかと思います。更に、様々な形で、平和の大事さ、核兵器の廃絶に向けて発信している市民、活動している市民とも接していただくことができました。

高齢化して体力も厳しくなっている中で、体験を一生懸命語ってくれる市民もいましたし、高校生が自分たちの活動について報告してくれたり、様々な市民が様々な表現方法で、平和の構築に向けて活動している様子を見ていただきました。それは被爆地として大事な発信であったと思います。

二つ目に、今回参加していただいた市長はそれぞれ、平和に向けて非常に強い思いを持っていらっしゃると思いますので、自分の国、自分の都市に帰られて、今回の4日間の出来事を皆さんに伝えていただけることも、非常に大きな意味があると思います。

三つ目に、平和市長会議のメンバーとして、平和市長会議の可能性を改めて感じた4日

間であったと思います。加盟都市も 3000 を超えて、様々な状況の中にある都市が参加していきまして、今回の 4 日間でも、色々な都市の状況や、これまで体験した戦争の話を知ることができました。それぞれ様々な歴史を抱えながら、今回、平和市長会議に集まっているわけです。核兵器の惨禍を体験したわけではないけれども、戦争など、人間はこんな愚かなことをしてしまうということを経験したところが、その対極にある平和を求めているわけです。闇を経験して初めて光の価値がわかるという都市がたくさん集まっていることは、すごく大きなことだと思います。例えば、国同士の交渉がなかなか上手くいかないことがあったとしても、市民と一緒に暮らしている市長は、そういう価値が分かって、別の枠組みを作ることができるし、別の思いで行動できるし、別のネットワークをつくることのできるという可能性を示していると思います。

そういう意味で、平和市長会議の今後の活動は、ますます重要になってくると思います。加盟都市の数が増え、様々な状況の都市が増えたことによって、運営体制の進化が必要となる時期に来ているのではないかとということも感じました。

色々な意味で、平和市長会議の重要性を改めて感じましたし、学び合うことの大事さも感じました。秋葉市長は「together」と仰いましたが、一緒に知恵を出し合って新しいステップに踏み出さなければいけないところに来ているということを感じた 4 日間であったと思います。以上です。

#### **司会（中川 長崎市広報広聴課長）：**

ありがとうございました。それでは、記者の皆様から質問をお受けしたいと思います。ご質問の際は、社名、氏名、どなたへの質問かを仰って下さい。

まず、市政記者クラブ幹事社の共同通信社からお願いいたします。

#### **共同通信：**

共同通信のカワモトといいます。4 日間の会議、どうもお疲れさまでした。まず、幹事社から 1 問目の質問ですが、秋葉市長と田上市長にお尋ねします。本日採択されたナガサキアピールで、六つの要請と四つの取組みが示されましたが、それぞれ強調すべき点を教えてください。

#### **平和市長会議会長 秋葉忠利（広島市長）：**

アピールに盛り込んだのは、実は、他にもたくさんあったものを落として、削って、六つになったり四つになったりしているので、特にこの中から、というのは難しいのですが、一応は番号順に、それぞれ 1 番目が 1 番というふうに考えていただいて結構です。しかし、2 番より 1 番が絶対に良いのかというと、例えば、加盟都市間の連携の向上を図ることは、平和市長会議としては必要条件ですから、やらなくてはならないことですが、核保有国の首脳に広島・長崎を訪れていただくことは非常に重要です。特に強調するのは

難しいですね。ともかく頑張って全部やります。それぞれの局面に従って、あるいは状況に従って、強弱のつく時期が違ってくると思いますけれども、それぞれ一つずつ意味のあることですから、全てをタイミング、状況に合わせて、しっかりと取り組んでいきたいと思っています。

**平和市長会議副会長 田上富久（長崎市長）：**

私も同じです。基本的に視点が違うので、どれが優先順位が上ということはないと思います。ただ、「以下のことを重点的に取り組む」という部分で言うと、1番目は、昨日の平和宣言でも申し上げた部分と重なりますので、この部分は、思いとしては強いと思います。

**司会（中川 長崎市広報広聴課長）：**

それでは、他の方。どうぞ。

**中国新聞：**

中国新聞のカナサキと申します。秋葉市長、田上市長のそれぞれに質問があります。基本的なことですが、今回のアピールの中で一番重要とされた「ヒロシマ・ナガサキ議定書」をNPT再検討会議で採択するという目標について、イメージがはっきりしないのですけれども、NPT再検討会議で採択というのは、どういったことをもって成るのでしょうか。例えば、1995年にNPTが無期限延長になった時の中東決議のように、独立した形での決議の採択なのか、それとも最終文書に「ヒロシマ・ナガサキ議定書」という文言が入ることがまずの目標なのか。5月のNPT準備委員会でアジェンダが決まっていますので、そこにねじ込んでいくのは、かなりの努力が必要だと思うのですが、その辺りの現状認識と見通しについて、どうお感じになっているのでしょうか。後、今回の市長会議で、そういった具体的なお話があったのかどうかを教えてくださいませんか。

**平和市長会議会長 秋葉忠利（広島市長）：**

われわれの目標達成については、確かに色々な課題があります。そういった課題を解決しながら最終的な結論にたどり着きたいと思っているのですが、その場合に大事なことは、最初から自分たちの活動範囲、目標の範囲を狭めてしまって、それ以外のことはやれませんかということで活動し始めると、おそらくできることも不可能になってしまうということだと思います。色々な可能性がありますので、その可能性を、状況、タイミングに従って十分に活用しながら、ともかく2020年までの核兵器廃絶につながるような形で、来年の再検討会議で「ヒロシマ・ナガサキ議定書」を取り上げてもらうことが目標です。その目標が達成されるような形で採択される、あるいは、再検討会議で取り上げてもらう、それ以前の国連総会で取り上げてもらうということが目標ですから、これでない駄目だと先に決めてしまって、それ以外の可能性があったのに使えなかったという状況は絶対に

作りたくありません。

**平和市長会議副会長 田上富久（長崎市長）：**

これまでも 2020 ということを挙げてきた中で、非常にたくさんの都市が参加しています。期限を設定して行動する中で、われわれもそこに参加したいという都市をたくさん集結することができたのは、ある程度明確に言ってきたからだと思います。そういう意味で、これまでも 2020 年という設定は、大きな役割を果たしていると思いますし、これからも、秋葉市長が言われたように、これを設定することで、さて、どこまで行けるのか、ということについては、進みながらということになると思います。

**西日本新聞：**

「ヒロシマ・ナガサキ議定書」が採択されるために、まず議案を提出する行動が必要だと思いますけれども、それはどこかの国が提案国になるのでしょうか。そうなら、それはどこになるのか、その点について、今回の市長会議の中でお話があったのか、あったとすれば、どういう方針に固まったのか、お話しください。

**平和市長会議会長 秋葉忠利（広島市長）：**

国連ですから、正式なメンバーは国の代表になりますので、国の代表に提出してもらうことになります。それについては、今までも、今年の準備委員会の時にも各国の大使と話をし、ロビー活動をしてきましたし、それ以前からもジュネーブ、ニューヨーク等で、そういった活動をずっと続けてきています。そういう形で、来年の再検討会議で、その成果が具体的に目に見える形で現れる、あるいは、今年の秋の国連総会で何らかの形で現れることを目標に、これまでの努力を続けていきたいと思っています。

今回の準備委員会でもかなりいい線までいったと思うのですが、オバマ政権が誕生してから、まだ時間が短いこともあって、十分な理解が得られませんでした。これからは、それなりの理解は世界的に深まっていると思いますので、状況は良くなっていると思います。今回も、随分色々な国の大使が広島にも来てくれましたし、今回の平和市長会議にも参加してくれましたので、そういったチャンネルも生かしながら、これまでの活動をさらに強化していきたいと考えています。

**司会（中川 長崎市広報広聴課長）：**

4時30分までとさせていただきますので、あと1問か2問ということをお願いいたします。

#### **朝日新聞：**

朝日新聞のカドと申します。秋葉市長にお尋ねします。今回、日本国内の加盟都市が初めて広島・長崎以外に開かれて、百何都市か参加され、会合もありました。改めて、日本国内の都市に開放したことによる国内における力としてどういうものを期待しておられるのかということと、今 302 と聞いていまして、20%ぐらいですが、これを今後どういうふうに広げていきたいのか、その辺についての具体的な方法についてお考えがあればお聞かせください。

#### **平和市長会議会長 秋葉忠利（広島市長）：**

数字がちょっと違うので、事務局はちゃんとデータを渡してあげてください。日本の加盟都市は三百六十いくつです。やはり民主主義の最終的な決断の場では数が物を言う場合があります。例えば、選挙は数の世界ですけれども、そういう意味で、数が多いことによる影響力は、こちらが嫌だと言っても、当然ついてくる話ですから、そういった点については、これからも十分生かしていくことができると思います。今月末の選挙に、それが直接結びつくのかということまでは予測できませんけれども、そういうところにも影響が出てくるような数になれば、素晴らしいことだと思います。

#### **中国新聞：**

中国新聞です。秋葉会長にお尋ねします。今回、7回目の総会ですが、第5回、第6回と比べて、今回の特徴など、お感じになることがあれば教えてください。とくに前回と比べて、核兵器を巡る国際情勢が大きく変わったと思いますが、その点を絡めて、今回の総会の特徴をどんなふうにご覧になったでしょうか。

#### **平和市長会議会長 秋葉忠利（広島市長）：**

今までも毎回、たいへん熱心な会合でしたから、特にということとは難しいのですけれども、敢えて述べるとすれば、やはりオバマ大統領のプラハ演説の結果だと思いますが、たいへん積極的で前向きな姿勢が目立ったことだと思います。例えば、先程簡単に報告しましたけれども、前回や前々回がそうだったという訳ではありませんが、往々にして、どのような会合でも、起草委員会は細かいところに集中して議論がなされ、結構時間が掛るものです。今回は非常に短時間でアピールを起草することができました。前向きにやりましょう、という発言がほとんどでした。2020年までの核兵器廃絶は可能だ、自分たちで頑張ろう、という決意が、そのような具体的なところに表れたのだと思います。

そういう意味では、たいへん元気の出る総会だったと思います。それは、オバマ大統領の演説という客観的な状況もありますけれども、広島と長崎は同じ被爆体験をしても、歴史も風土も人も違い、長崎で開いた結果として、長崎市民、被爆者の皆さんの気持ちもものすごく大きな要素になって、前向きなエネルギーを作り出したという気がします。そ

れももう一つ非常に重要な要素だと思います。もちろん田上市長の貢献が大変大きかった訳ですが、それは敢えてここ言わなくても、後でまたゆっくりとお話したいと思います。

**司会（中川 長崎市広報広聴課長）：**

ほかによろしいでしょうか。なければ終了したいと思います。

**平和市長会議会長 秋葉忠利（広島市長）：**

どうもありがとうございました。

**司会（中川 長崎市広報広聴課長）：**

以上で終了させていただきます。ありがとうございました。